

原子爆弾投下の日

宮原浩子（13歳の時に長崎で被爆）

昭和二十年八月九日午前十一時二分、長崎に原子爆弾が投下された時の状況をお話致します。その時私は十三歳でした。

抜けるような青い空、輝く太陽、蝉の声、日頃は空襲警報のサイレンが鳴ると学校を休むが、警戒警報のサイレンだったが、活水高等女学校を休んで長崎医大のそばの防空壕に行きました。そこは原子爆弾が投下された中心地より一キロ以内でした。

私の父は私が小学校一年生の時に亡くなったので、その日母は山の向こうの会社に務めに行っていて留守でした。

兄は長崎医大薬学部に在学中だったが、学徒動員で対岸の三菱造船所で仕事をしていました。その日はガラスの破片が身体にささり、何日か経って母と私が身を寄せていた母の友達の家に戻ってきました。

姉は何故か会社を休んで家でミシンを踏んで何か縫っていました。

私が防空壕に行くと言ったら姉が水筒にお茶を入れて、お弁当を作ってくれました。

それを持って防空壕に行きました。姉はミシンを踏みながら向こうを向いたまま、私の方を見ないで手を振って「浩子ちゃん行ってらっしゃい。」と言いました。私は「お姉ちゃん行ってきます。」と言いました。それが姉と私の最後の別れになりました。

私が入った防空壕は、長崎医大の側の爆心地に近かった。山をくり抜いただけの湿気が多くじめじめしていて、大きな石が幾つか置いてあるだけの薄暗いところでした。

しばらくして私は外に出ました。出た所に知らない女性が一人立っていました。私は空を見上げると白い敵機が上空を飛んでいました。それを見て、あ、あれは敵機だと思って壕に入って十歩くらい歩いて冷たい石の上に座った途端にものすごい爆風と閃光が入口をよぎりました。私は敵機を見て防空壕に入らなかったら全身大やけどを負っていたでしょう。

その時一緒に外に居た女性は壕に入らなかったので大やけどを負って火傷（ひぶくれ）で皮膚がドロドロになっていました。

その時私とその女性の運命が決まりました。入口を支えていた木の棒が半分以上壊れ、もし全部入口が壊れていたら私は生き埋めになっていたでしょう。そこに男の人が入ってきて「今出ると危ない。長崎は全滅だから。」と叫んだ。

しばらくして外に出ると長崎医大の全部の窓からは火を吹き、小さな川や道にも皮膚がドロドロとしてはがれた多くの人が水！水！水！とか細い声で私たちを呼んだ。小さな川も溝にも死体が溢れ、水を求めてうごめいていました。その時は、理由は解らなかったが、水をやってはいけない、と大人の人に言われたので水筒の水は上げなかった。

しばらくして山の向こうに務めに行っていた母が山を越えて私と姉を探しに防空壕に来ました。けれど立っていたのは私一人だった。

それから母と私と二人で「お姉ちゃん。尚ちゃん。」と大きな声で叫びながらたくさんの死体の中を、姉を探しました。その夜他の防空壕に二人で座っていると大やけどした女性が入ってきて「私がお宅のお姉さんと私の父の手を引いてきたがお姉さんが「もう私は駄目だから先に行って下さい。」と言ったので手を離してきました。」と言いました。外は真っ暗で探しようがなかった。翌日夜が明けるのを待って焼けた家の廻りを二人で探しました。

その時に姉が着ていた洋服のはし布ともって逃げた袋のはし布が落ちていました。姉の遺体はみつからない。どこで焼け死にしたのか、どこかに連れていかれたのか解らない。

姉を探す道の空き地に木材を積み重ね多くの人の死体を茶毘に付している。それがそのまま燃え尽きるといいが途中雨が降ると火が消える。途中まで焼けた死体はぐにゃぐにゃの恰好でそのままになっている。それがまるでするめが焼け損なった状態に見えるので、私は人間がやける臭いとするめの形が思い出されるのでそれから一度もするめを食べません。

私は未だに後悔して姉の遺影に言っている。あの時私は一人で防空壕に行かないでお姉ちゃんと一緒に行こうとどうして言わなかったのかと、二人で手をつないで逃げればどんなに心強かったかと運命の別れ目に涙しています。

八月九日の被爆の後、九月に入って私は三十九度以上の高熱が続いたので福岡の大学病院で診察を受けました。結果は白血球の減少と肝臓を患い学校を半年間休み、次の年の四月に登校しました。中学2年生になりました。

一瞬にして人間を殺す放射能、核兵器のおそろしさ、むごたらしさ、真黒こげになった人、人、人これが戦争なのか、何の罪もない人達は全てお国のためと純粋に思っていた人々を悲惨な目に合わせた戦争。この怒りをどこにもってゆくのか。私の姉も何処かで真黒コゲになって死んだのか。痛かっただろう。苦しかっただろう。怖かっただろう。何を思って死んだのか。

私は十三歳の時に多くの人々の悲惨な人間の最後の姿を目撃しました。生き地獄を見ました。私はその日その瞬間に防空壕に入ったので、ケロイドはないが放射線を全身に浴びてい

ます。被爆の症状がいつ出てくるか不安を抱きながら現在は神様に感謝しつつ、生を受け止めております。

日本の核兵器禁止条約批准の実現と平和な世界が私たち被爆者の切なる願いです。

姉の死を悲しんだ母の思い出（2021 年執筆 - 原爆投下の日続き）

母が無口になってそれからしばらくして尚ちゃん（尚子一ひさこ 姉の名前）は、やさしかった、と言った。

私は「妹の私が生きているじゃあないの。これが親孝行でしょう！」ときつい言葉で言った。

私の高熱が続いたので、福岡の九州大学へ行く汽車の中で、母が言った言葉が印象に残っている。

「尚子を亡くしたのに、その上浩子まで死なせない、絶対に死なせない。」

心の底から絞り出す様な悲しみの言葉だった。

父を亡くした後、家族を養いながら、どうしても私を生かすために、固い信念をもって助けてくれた母。

辞書によれば、お通夜とは忌の前夜、葬儀の前夜のことと書いてあるが、母の言うお通夜とは毎月（姉）の亡くなった日の前夜の事であった。

その毎月のお通夜に私は学校の授業が終わったあと制服を着たまま、姉がねむるお墓に母と待ち合わせて行った。

お住職様の奥様から仏様の御心を拝聴しに伺った。

母は心を静めるためと思うが、私はその時に頂いたお茶の香りと味が残った。

母は姉の写真がある部屋で、一人で仏教の御本「真宗在家勤行集」を拝読していた。

あの難しい字と文章をブツブツと一人で唱えていた。背中が丸くなって小さくなった母が読むこの御本は、茶色くなって昭和二十年十二月九日の求乏と記してある。

姉の死後四か月目に求めている。

母は「淋しか……。淋しか……。」（長崎弁）と言いながら七十五歳で亡くなった。

父と姉がいるところへ旅立った。

父と母と姉と兄を亡くした私は一人になった。

私は夫を亡くして二十年になるが、娘が二人いる。長女は染色体異常のダウン症で、五十六歳。(2021 年現在) 知能指数三十五、五 0 に満たない。

次女は国連に勤務し、スイスのジュネーブに住んで、フランス人の夫と娘と三人で暮らしている。

次女は私の事を心配して毎週日曜日にビデオ通話をして安否を訊ねてくる。

私は現在長女の事で苦勞しながら、笑顔にホットしながら人生を経験している。

スイスの一家は、一年に一度か二度来日している。子供の夏、冬休みを利用して。

私の今の心の拠り所は、パステルで絵を描くこと。外国の建物が好きで、静かな屋間に一人で外国のカレンダーを見ながら描いている。この平和なひと時を大切にしながら。

今を生きる若い世代は重責を担っている。

日本が、世界が、我々世代が残した暗い道筋でなく、明るい光が射す道筋を創造してほしい。戦争とは、悲しみしか残らない。